

エージェントAI「Manus」の全貌：技術的実力と地政学的リスクの検証

Manusは、単一のAIモデルを提示する製品ではなく、既存のフロンティアモデル（ChatGPT、Claude等）を束ねて「実際に仕事を完了させる」ことを狙う「Action Engine（実行レイヤー）」です。技術的には、タスクごとに隔離されたSandbox環境や、認証済みサイトも操作可能なCloud Browser、並列エージェントによる大規模調査（Wide Research）など、実行面に特化した強みを持っています。しかし、その実力は極めて模倣です。性能面ではOpenAIを実証と検証データを「性能面ではOpenAIを上回ると主張する一方で、独立した検証データが不足しており、実取引タスクでの失敗も報告されています。さらに、2025年末のMetaによる買収発表と、それに対する中国当局の「買収書き戻し命令」という前代未聞の地政学的トラブルの渦中にあります。技術的な有望さと、法規制面での不安定さが共存しているのが現状です。

技術的実体：単一モデルを超えた「実行エンジン」

Manusはモデルではなく「Action Engine」

独自の異業モデルを構築するのではなく、外部モデルを「Context Engineering」によって割賦し、複雑なタスクを充通させる実行レイヤーです。

隔離された実行環境「Cloud Sandbox」

各タスクに付随された仮想マシン（VM）を割り当て、ファイル保存やブラウザ、コード実行を安全かつ独立して行います。

並列処理による「Wide Research」

メインコントローラが複数のサブエージェントを並列駆動し、大規模な調査業務を効率的に遂行する設計となっています。



性能評価：主張と現実のギャップ

主張

OpenAI Deep Researchを10%上回ると主張
GAIAベンチマークで凌駕（公式説明）

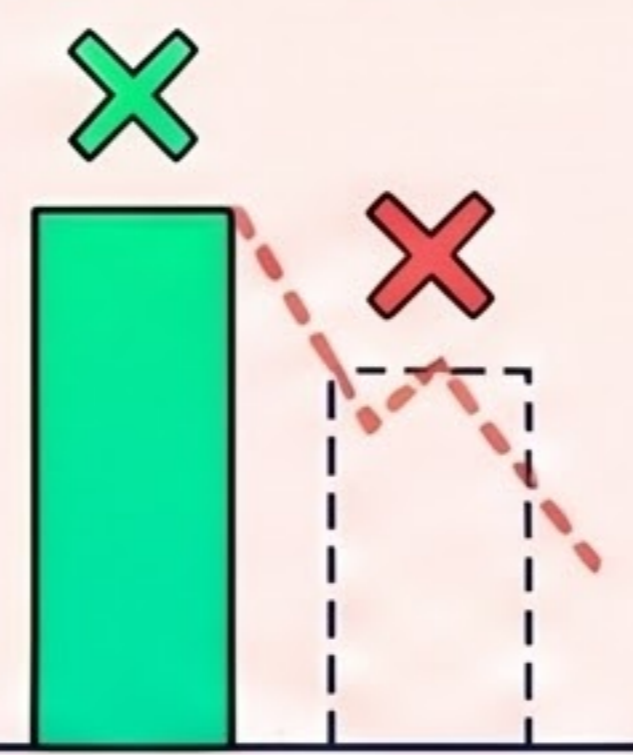
二重盲検テストで満足度が10.2%改善（1.6 Masモデル比社内秘論）



主張

現実

独立した検証リーダーボードへの掲載未確認
第三者による極端性未確認



現実

得意な「知識労働」と苦手な「実取引」



得意な「知識労働」



苦手な「実取引」：フライト予約や購買などで途中失敗報告

実用事例と導入への推奨

EXAMPLE

半構造化された「知識労働」への適用

SNS投稿の自動生成、トレンド調査、オンボーディングアプリの構築など、アウトプットの悪さが許容される用途で成功割合が多く見られます。



PROCESS STEP

導入前の「4つの推奨ステップ」

- ① 技術監査（データ保存先の確認）
- ② 初回労働でのPoC
- ③ 法務・地政学リスクの精査
- ④ 権限を限定したプライバシー設計

地政学的リスク：Meta・中国との複雑な関係

2025年3月 / 夏



2026年1月：中国当局による取引審査開始
Metaによる買収発表
Metaが買収公表、Manusも統合告知。スタッフ移籍通届

2026年3月：中国当局による「巻き戻し命令」
中国NDRCが国家安全理由に取引断絶命令、共同創業者由国制裁など法的不安定化

SUPPORTING FACT

データ共有の証拠は見当たらず

中国当局の規制制限行儀は確認されるも、ユーザーデータが親的に優越共されている証拠は見つかっていません。